

第2章

植民地主義的言説の再読

プラットの読解へのもうひとつの疑問

18世紀末、ヨーロッパ世界にはもろもろの思想をフルに動員する均質な知の体系が構築された。非ヨーロッパ世界は、この知の内部で地理表記化され、理論的にマッピングされ、図表化されていった。そして、このことをつうじて、ヨーロッパを〈中心〉とする帝國的ヒエラルヒーの〈周縁〉として領有され、ヨーロッパより劣っているがヨーロッパにとって親和的な場として、西洋の言説にとりこまれていった。世界的な規模でのこのような諸空間の序列化は、とりもなおさず、非ヨーロッパ世界へのヨーロッパのヘゲモニーの拡大をおしすすめ、そのヘゲモニーを揺るぎないものにする帝国主義的言説体系の土台である。18世紀末とは、その意味で帝国主義がそのもっとも深いところで始動しはじめた時期なのであって、この時期に西洋世界に生まれたフィクションやあたらしい歴史叙述、あるいはまた哲学的言説といったものが帝国主義と土台を共有していたことは忘却されるわけにはいかない。

エドワード・W・サイードは『文化と帝国主義』 *Culture and Imperialism* のなかでこのようにのべるとともに、非西洋世界を西洋の知の体系のなかに領有するにあたって重要な役割をはたしたのが、旅行者や商人、学者、歴史家、小説家といった「ヨーロッパ人観察者の権威」であったと指摘している⁽¹⁾。同じことは、19世紀前半にはカリブ海地域をのぞくほとんどの地域が宗主国との紐帯をたちきったラテンアメリカについてもいえる。プラットというところの「資本主義の尖兵」たちがそれである。

ところで、プラットによれば、これら「資本主義の尖兵」たちの言説は、ヨーロッパの都市ブルジョアジーの価値観のもとに南米大陸の事物をことごとく断罪するものだったという点で、きわめて均質かつ一元的であったという。「資本主義の尖兵」たちは、

一様にラプラタの自然的風景を醜悪なものとして拒否し、プラグマティックで経済主義的なレトリックを用いつつ、生産を合理化したり拡大することが不可能な遅れたものとしてスペインアメリカの経済を批判したというのである。プラットによれば、「資本主義の尖兵の言説の基本線ははっきりしている。それつまり、アメリカは産業と効率の舞台に変換されなければならず、そのコロニアルな住民は、怠惰で階層未分化のままで欲望も趣味も現金ももたない不潔な大衆から、賃金労働者と宗主国の消費財のための市場へと変換されなければならない、というものである」(2)。はたしてそうであろうか。

なるほど、プラットのいうとおり、かれらの記述はラテンアメリカの風景や社会を〈遅れた〉ものとして固定化しようとするものであるという点で、きわめて均質的かつ一枚岩的(モノリテック)であるかもしれない。ヨーロッパ人旅行者の記述のなかで用いられている時間のトリックにも、帝国主義的な言説は明白に表われ出ている。たとえば、1842年から10年あまりにわたってブエノスアイレスに滞在したアイルランド商人ウィリアム・マッカン William MacCann の『アルゼンチン諸州をめぐる2,000マイルの馬旅』*Two Thousand Mile's Ride through the Argentine Provinces*。このアルゼンチン旅行記のなかで、マッカンが食べ慣れたイギリスふう「ブレイクファスト」をパンパのただなかでとり、青空のしたで愛するひとたちを夢にみることを以上の快樂はないとしたうえで、つけ加えていうには、「そのときミルトンやシェークスピアが描いたような田園の生が喚起された」と(3)。この最後の1句が発されたとたんに、19世紀なかばのパンパは、当時のイギリスが失ってしまったふたつの過去の表象——貴族と田園生活——とつらねられる。そのようなものとして「喚起」されることによって、パンパは突如として時間の止まった場へと変貌し、そこでの生はあたかも博物館や美術館の陳列棚に並べられたオブジェのように、観察者によって鑑賞され愛玩される時間なき対象へと変えられてしまうのだ。

しかも、それは通常想定される博物館や美術館ですらない。パンパは、シェークスピアの作品においてもミルトンの作品においても登場しうる、いかえれば厳密にはそのどちらのどの作品にも固有でない陳腐な空間表象を模倣しているにすぎず、イギリスのマスターピースが造りあげ典型化した、つまりはイギリスに起源をもつ凡庸で紋切り型の生の表象を反復するだけの、歴史的現在なきクリシェの空間に変えられるのだ。それはすでに過去のイギリスの文学者によって書かれ、また19世紀のイギリスの知識人がす

でに見たことがあるものとして「喚起」されうる、なじみ深くも手垢にまみれた風景である。イギリスで生産された風景を起源にすえ、非西洋世界の空間をその表象を模倣したものであると措定することをつうじて、非西洋世界は、著者 author イギリスの権威 authority を保証する劣位の空間として、しかしながら同時にイギリスにとってきわめて親和的でアットホームな実感を与えてくれる空間として、マッピングされる。一見したところ非政治的な言述も、帝国を中心とした非西洋世界の序列化と意識の地図化をうながす帝国主義的な機能をはたすのである。

とりわけ非西洋世界の空間が過去の時間ではなく19世紀の現在と結びつけられるとき、そのときにはレトロスペクティブな審美的表現は払拭され、帝国主義的な利害関心がむきだしになる。トウクマン州を旅するアンドルーズ大佐は、マッカンと同じようにミルトンのエデンの園とトウクマンの風景を類比させながらも、「このような自然の驚異がいつの日かはるか遠くのイギリス人たちによって踏査され、鉱山開発にゆだねられて、国の商業的な富に利するようになりますように」とつけ加えるのを忘れなかった。そして、州議会議員トマス・ウガルテ Don Thomas Uogarte [sic] (Tomás Ugarte) とともに近くの山稜を眺めやりながら、ひろがるその山麓付近に遠からずして実現されるであろう産業の空中楼阁を思い描いてみせるのである。「わたしたちは豊かな鉱脈を採掘し、鑄造炉を建設し、高いところで働き蜂のようにせっせと動きまわっているおおぜいの労働者たちを思い浮かべた。そしてこの広大で無人の地域が、9,000マイルから10,000マイル四方にわたってイギリス人のエネルギーによって植民されると想像してみるのだった」(4)。

いまやミルトンの楽園は、帝国の占有と横領の欲望によって埋めつくされる。それはもはや失われた楽園を再現する空間ではなく、約束された未来の実現を待ちかねている空間である——「ありふれた勤勉さでもって、ほんのすこしばかりの技術のたすけをかりて自然の生産性を高めるのはどんなにたやすいことだろう」。けれども、豊かさの保証された大地の未来は、その土地に住んでいるひとびとによってはとうてい実現されえない。「まさに宇宙の庭園にいながら、これほどに嘆かわしく時を無駄に費やしているだけのひとびとを目にするのはまことにつらいものがある。かれらの怠惰な慣習は、まがうことなくかつての主人からうけついだものだ。もしやバスク人をのぞいたスペイン人は、ヨーロッパでもっとも怠惰な人種ではなかろうか。かれらの怠惰は、必要なものはすべて自然が与えてくれる、この乳と蜜の地で避けがたく増長したにちがいない」(5)。

自然的風景は、こんどは現地の住民の人種的劣等性を証拠づけ説明する原理として用いられることになるわけである。

つまりはこういうことだ。現在から切断された過去の時間のたゆたう審美化された静態的な空間表象は、19世紀なかばの現在に接合されたとたんに、怠惰な民を棲ませ、その怠惰な性質を増長させる空間表象へと変貌する。そのとき過去は、もはやミルトン的な楽園をやどす時間でなく、植民地時代の遺産として反復的に現在へとたちあらわれる劣等性の負の遺産にほかならない。だから、いまやそういった過去や現在からきりはなされた未来にこそ、楽園は実現されるのであり、その未来をもたらすのがイギリスだというのである。スペインからのラテンアメリカ諸国の独立をいち早く承認したイギリスの旅行者たちは、独立戦争の戦火が鎮まってまもないラプラタで、帝国の論理を忠実になぞってみせるのだ。すなわち、かつての宗主国より優れた人種からなる新参国イギリスをあたらしい宗主国にすることを、ラテンアメリカの大地と社会は求めている、と。

しかしながら、どうだろう。旅行記はたんに副次的で非正統的で分析に値しないテキストなどではなく、植民地主義的言説の生産の場できわめて重要な役割りをはたしたのだとするプラットの主張はまったく妥当であるにしても、彼女の読解は、植民地主義的言説の生産という側面を重視するあまり、テキストから析出されるヨーロッパの支配のテクノロジーだけを強調し、支配する権力の水ももらさぬ強大さだけを記述するものになってしまっているのではないだろうか。支配の技術の一部としてテキストをとらえるなら、そうした読解のなかで旅行者＝書き手は、劣性の現地住民に混じることなく、つねに安定した高处の視座からヨーロッパの優越する力にものをいわせて周囲の非ヨーロッパ世界を睥睨する中心的な観察者としてたちあらわれるだろう。だが、書き手のそういう自己表象の完璧さをわたしは疑う。旅行記が支配装置の一部として機能したことそのものを疑うのではない。そうではなくて、書き手の自己表象がそれほど一分の隙もなくテキストの内部で完遂されているだろうかと疑うのだ。たぶんヨーロッパ人観察者とそのテキストの権威は、非ヨーロッパ世界を異なる思考体系のなかに暴力的におしこみ、その思考体系の内部で理解し、分類や分析の可能な対象として客体化し、かつそうした客体として表象することのなかに、その権威の源を有している。植民地主義的言説は、この権威のうえに構築される〈観察し記述する主体〉と〈観察され記述される客

体)の絶対的な二項対立からなるヘゲモニー関係を固定化する言述である。ただ、わたしが疑ってかかるのは、はたして非ヨーロッパ世界はそのような客体として成功裡に表象されえているだろうか、あるいは旅行記の書き手の帝国主義的な眼差しによって消費されつくしているのか、という1点である。

ここでわたしが具体的に思いうかべているのは、旅行記ができれば叙述せずにはすませておこうとしているにもかかわらず、旅行記というその性質上避けるわけにはいかない現地のひととの接触の場の記述——それも高处から見おろして観察される〈群れ〉としての匿名のひとびとではなく、ともすれば、「ドミンゴ」Domingo(6)、「ドン・パンチョ・ロドリゲス」Don Pancho Rodriguez(7)、「ピサロ」Pizarroとその友人「クルス」Cruz(8)といった名前と呼ばれることさえあって、単純に〈群れ〉へと還元されていない現地の道案内人との接触の場の記述である。いいかえれば、旅行者とあるひとつのエスニシティとの〈出会い〉であるとか、複数のエスニシティ間の〈接触〉といったような遭遇の物語ないし説話的な磁場をさしてプラットがそう呼ぶ「接触領域」なる概念装置の外部にひらかれる接触の場の記述ということになるかもしれない。おおくの場合、旅行記にとっていわばどうでもよいことがらとしてテキストの余白に書きつけられていたり、偶発的なできごととして前後の叙述と有機的に関係づけられずに書きながされているだけのこうした接触の場の記述においても、はたしてコロニアルな表象は貫かれているだろうか。そうした接触の場におけるひともまた、植民地主義的言説を構成する怠惰な人間であるとか、約束された未来を実現するイギリスを(アンドルーズ描くトマス・ウガルテのように)みずからすすんで受け入れる協力者であるといった表象——それは帝国主義にとってまことにつごうのいい表象であるわけだが——によって完全に代替されているのだろうか。

たとえば、ヨーロッパ人の優越性を誇示する言述を展開する一方で、旅行者はその優越性をもってしても自分ひとりの力でラプラタの平原部を旅することができたわけではない。商業開発の可能性を探ると同時に、アルゼンチン政府とイギリス政府間の移民事業にも深く関与したジョン・A・B・ボウモント John A. B. Beaumont は、1826年から翌年にかけてアルゼンチンとバンダ・オリエンタル(現ウルグアイ)を訪れたさいの旅行記『ブエノスアイレスとラプラタ隣接諸州の旅』*Travels in Buenos Aires and the Adjacent Provinces of the Rio de la Plata* のなかで、道案内人ドミンゴを雇うにあたって、わずかな

例外をのぞいて駅宿の設置されていないラプラタの道をいくためには、「道案内人ないしバキアーノ、またはわたしたちが御者と呼ぶ人間を、旅に必要な馬1団ぶんの金を払うことを条件に雇い入れるほかに手だてはない」、といている(9)。またアンデス麓の「メンドサに外国人が到着すると、どのように旅をつづけたらよいのかわからず途方にくれてしまう」が、現地で「アリエロ」すなわちラバ追いと呼ばれる道案内人の力を借りればアンデス越えも可能になるとジョン・マイアーズ John Mires はのべ(10)、ウィリアム・マッカン、大雨後の霧深い道をいくにはひとりの道案内人に頼らなければならなかったと回顧している(11)。このように道案内人の力を借りなければ、旅行者は、観察はおろか、旅の1歩を踏みだすことさえままならなかった。つまり、遅れた住民という表象のもとにラプラタのひとびとを総合しようとする植民地主義的言説は、接触の場の記述では奇妙なほどかれらの力に依存する書き手自身の姿をさらけださずにはいなかったわけである。そのような記述のトポスにおいてなお、植民地主義的な表象は変わらず実現されているだろうか、とわたしは問うのだ。

念のためにつけ加えておけば、わたしはこうした記述のなかにいわゆる〈民衆〉の真実の姿や歴史の実体といったものの証拠を見つけだそうとしているのではない。そうではなくて、こうした接触の場の記述のなかに、テキストのほつれやかぎ裂きをこそ見ようとしているのであって、テキスト外の実体的ななにかを直接そこに見ることは不可能だと考える。ただ、こうしたほつれをかがって1枚の連続する植民地主義的言説の布を織り上げなおすのではなく、それをいわばグランジ grunge のまま、みすほらしく擦り切れたり色が剥げおちた不格好なありさまのままに残しておくこと。そうしていかかわしさや曖昧さの混ざりものとしてテキストを読みなおすこと。いいかえれば、テキストのなかで排除されようとしているものや、書き手が見せないでおこうとしているものにまでテキストの読みを拡大してみること。そのことのなかに、旅行記のもうひとつ別の読みかたがあるのではないかと考えているのである。

この分析をおこなうにあたっては、サイドが『文化と帝国主義』のなかで提示している「対位法的パースペクティブ」 contrapuntal perspective ないし「対位法的な読み」 contrapuntal reading にその方法論的な手法を負っている(12)。植民地主義的な支配の過程とそれへの抵抗の可能性にまでテキストの読みを拡大し、テキストからは強制的に排除されようとしているものを読解していくこと。前章ではそれを、クリオージョ知識人のテ

クストを用いて試みてきたが、この第2章では、西洋人旅行者のテキストという、一見したところより堅固な植民地主義的言説となっている素材をとりあげて、植民地主義的な目的のためにラプラタを訪れたこうした旅行者からの呼びかけに呼応して表出する、ラプラタの民の声や身振りが、テキストのなかに書きとめられているさまを読解していく。

重要なのは、そういった声や身振りが、かならずしも植民地主義的言説に準ずるのも、明らかに対抗的な立場をとるのでもないことだ。むしろそれは、植民地主義的言説にからまりあいながらそれに異議申し立てをしたり、あるいはまた支配的言説を中断したり宙吊りにしたりしている。支配的な層の叙述のなかに書きとめられ、エクリチュールの規範の内部に表象されようとしているにもかかわらず、植民地主義的な言説から、なかば自律的な機能を有する民衆の声や身振りが、そこに書き込まれてしまうことになるのである。だが、そうした声や身振りは、いわゆるカウンター・ディスコースの成立を意味するものではない。というのも、あくまでそれは、植民地主義的言説の内部に、その複数の〈はじまり〉 beginnings の起点を有しているからである。つまりそれは、植民地主義的言説の逆像として呈されるのでもなければ、植民地主義的言説にとって相補関係に最終的には還元されてしまうことになる二項対立の片方の項として表出されるのでもなく、「対位法的」なあらわれかた以外のしかたではあらわれえない、そういった声や身振りなのである。

中断する「ノ」そして「キエン・サベ」

聖書や怪物伝説、驚異譚、うわさ話であれ、より「科学的」で「実証的」な裏づけのとれたガイドブックや旅行記、新聞テレビのニュースであれ、もろもろのメディアによってあらかじめテキスト化された〈現実〉に導かれてなされるもの——それが旅行だといってよいだろう。19世紀の「資本主義の尖兵」たちも例外ではない。これまで見てきた旅行者だけでも、たとえばボウモンは先行する他の旅行記をみずから参照しているだけでなく、「知的で情報の豊富なこれらの旅行者の著作を読まずしては、いかなる人間も資本も南米に上陸すべきではない」と断言して、ヘッドとマイアーズの旅行記を事前に参照すべしと読者に命じている⁽¹³⁾。また、そのボウモンをマッカンが参照し、他方、アンドルーズは同時期にラプラタを訪れたヘッドとマイアーズ両者から情報を得

ているといったぐあいに、旅行者たちは相互に密接なテキストの網目を形成していた。植民地主義的言説とは、このような間テキスト的ネットワークが保証するテキスト的〈現実〉のうえに構築されるメタ・ディスコースのことである。

そして、こうした間テキスト的ネットワークのなかで19世紀はじめのラプラタがどのような〈現実〉としてあったかについては、たとえばヘッドの旅行記につきのようにある。ブエノスアイレス市を出て平原部に入っていこうとするとき、「パンパでは絶対に武装していなければならない。おいはぎがうようよしているからだ」としたうえでヘッドのいうには、「こうした連中の目的はもちろん金だったから、わたしはいつもみすほらしい格好をしたうえ、きちんと武装していた。…〔中略〕…わたしはつねに2丁の拳銃をベルトにはさみ、雷管式の二連発銃を手にしていた。原則としていつときたりと武装を解くことのないようにしていたし、ガウチョに出会うたびに二連発銃の両筒の撃鉄をおこしておいた」というのだ。しかも、おいはぎだけでない。さらには、インディオという危険もある。インディオに出くわせば、「拷問にかけられたり殺されたりすることもありうるが、道で会うことはしごく稀だ。だが、かれらはとても狡猾で馬上にあって敏捷なうえに、あの地域はまったくの無人なので、インディオについての情報を得ることはまったく不可能だ」(14)。

また、たとえこうした危険な輩に出くわさずとも、パンパには別の危険がある。落馬という危険である。「パンパを旅するうえでもっとも危険なのは、ビスカチャの穴に足をとられてしょっちゅう落馬することだ。ギャロップしていたわたしは、平均して300マイルに1回ほどの割合で馬もろとも転倒した計算になる。土が柔らかかったからいちどもたいした怪我はしなかったが、何百マイルもろくな治療を受けられないような場所で手足の骨を折ったり関節を脱臼したりしたらどれほど絶望的な状況におかれることになるかと、出発まえから考えないではいられなかった」(15)。おいはぎ、インディオ、穴居性齧歯動物ビスカチャの穴。旅に出るまえからヘッドが思い描いていたパンパとは、こういったもろもろの罠が旅人を待ちふせている空間であった。

ところがである。太平洋岸のチリからアンデスを越えてブエノスアイレスに戻る途上、サンルイスとコルドバの州境あたりまでやってきたヘッドは、とある駅宿の親方の世話でひとりの道案内人を雇う。そして、駅宿に隣あわせた小屋で生まれ、「町も村も見たことがなく」、年齢不詳で読み書きのできないこの案内人と連れだって、道をしば

らく進んだときのことであった。

すこしあとでわたしたちは道に血痕が残されている場所に出くわした。わたしたちはしばし馬の手綱をおさえてその血痕を見つめていた。たぶんだれかが暗殺されたのだらうとわたしがいうと、ガウチョは「ノ」〔否〕といい、血痕の近くの痕跡を指し示しながら、これはだれかが落馬してはみを壊したのであり、その人が立ってはみを修理しているあいだに、血が馬の口からしたたり落ちたのだという。もしかしたら怪我をしたのは人間 *man* のほうだったかもしれないとわたしは抗弁したが、これにたいしてもガウチョは「ノ」と答えたうえで、数ヤード前方の小道のうえにあるなにかの痕跡を示しながら、「だって馬はギャロップで駆けだしてますよ」といった(16)。

血痕が、おいはぎかインディオによる「暗殺」、もしくは落馬によって人間が「怪我」したという過去の事実を裏書きする〈証拠〉であるとヘッドに思われたのは、少しも不思議ではない。危険な平原という既成の情緒的な物語の〈現実〉を進む旅人としては、道に残された血痕を目にしたとたんに、すぐさまそれを自分の〈現実〉にてらしあわせ、実際におこった事件の現実を意味する記号として読みかえずにはいられなかったからだ。血痕は、ヘッドの物語のコンテクストのなかで〈証拠〉になったのである。パンパが危険だという〈現実〉を証明する血痕が、血痕を出現させた原因へと因果論的に関係づけられていけば、よりメタ・レベルの言説の〈証拠〉、すなわち治安が悪く医療施設の欠如したラプラタ社会の〈遅れた〉現実を裏づける数おおくの〈証拠〉のひとつとしてデータベース化されたとしてもおかしくはなかった。

だが道案内人は、植民地主義的ディスコースへと接合させていくヘッドの言述を、「ノ」の鋭い1音で中断する。つぎなる展開をうながす同意や肯定のみぶりを期待していたヘッドの言述を、突然発されたこの「ノ」の1音でたち切る。ヘッドの言述があったからこそひきだされ、ヘッドの言述を否定する、この1音でたち切るのだ。つづく挿入部は、血痕という主題を危険な平原という中心楽想にあわせて展開しようとするヘッドのディスコースの調和を乱し、殺人や人身事故といったたぐいの楽想のメロドラマをだいなしにしてしまう。なにしろ挿入されるのは、〈だれかが落馬して壊したはみを修理して立ち去った〉という平凡でちっぽけなできごとのフラッシュバックにすぎないわ

けだから。中絶的で挿入的で偶発的であることによって、道案内人の語りはヘッドの言説に異議を申し立て、植民地主義的言説へのアクセスを遮断しているのである。

あくまで楽想を維持するために連続していこうとする記述と、その記述の連続性を中絶しようとする語り、合一点をむかえることなく対立し重なりあいながら織り目をなしているこのような箇所は、チャールズ・ダーウィン Charles Darwin の『ビーグル号航海記』 *Journal of Researches into the Natural History and Geology of the Countries Visited During the Voyage of H. M. S. "Beagle" Round the World* のなかにもみいだすことができる。

1833年8月。海軍大佐ロバート・フィッツ＝ロイ船長 Robert Fitz Roy の率いる軍艦ビーグル号に同乗し、5年間にわたって主として南米の博物学的探査の旅にあったダーウィンは、ブエノスアイレス州南部のバイアブランカにいた。おりしもこの年3月から翌年にかけて、アルゼンチン南部6州連合のもと、それまでにない大規模なフロンティア戦が展開されていた。政情の急変でたち消えになったとはいえ、当初の予定では、隣国チリと協同のうへ太平洋岸から大西洋岸にかけて南米大陸を東西に縦断する前線をはり、南部にむけていっせいに軍事行動を開始してインディオの領域を征服しようというものであった。結局チリが脱落し、一部の州ではそれ以前の対インディオ局地戦や早魃のため十分な軍隊を配備することはできなかった。それでも、アンデス山脈から大西洋に達する400レグアの前線に、あわせて4,000人ちかい兵とその3～4倍の数の馬、さらに州軍と同盟する何百という数のインディオが投入された⁽¹⁷⁾。最終的に2,900レグア四方の広大な土地を奪いとることになるこの戦争のさなかにフロンティアの前線を旅していたことになるのだから、ダーウィンが当初から「キリスト教徒」を敵とするインディオをひどく警戒していたとしても、不思議ではない。

ネグロ川河口カルメン・デ・パタゴネス近くで下船し、陸路北上してバイアブランカの港でふたたびビーグル号に乗ることになっていたダーウィンは、道案内人とともに港にむかう途上、3人の人間が遠くで狩りをしている姿に出くわしてぎよっとする。

かれ〔道案内人〕はただちに馬からおりとかれらをじっと見つめながら、「連中の馬ののりかたはキリスト教徒ののりかたじゃない。それにだれも要塞を出てないはずだ」といった。3人の狩人はひとかたまりで行動し、わたしたちと同じように馬からおりた。ついにそのなかのひとりがふたたび馬にまたがると、丘を越えて見えなくなって

しまった。「わしらも馬にのらにゃなりません。銃に弾をこめてください」というと、道案内人は自分の刀をたしかめた。「インディオだろうか?」とわたしはたずねた。すると「キエン・サベ Quién sabe [さあね]? 3人以下の人数ならたいしたことはない」との返答。そのときわたしは、立ち去ったもうひとりとは仲間のインディオを呼びに行くために丘を越えていったのだと思いあたった。そうわたしは示唆したが、ひきだせた答えはすべて「キエン・サベ」であった(18)。

馬上の3人を目にしたとたん、それを「インディオだろうか」とたずねたダーウィンも、ヘッドと同じように、そこが前線だというコンテキストから現実をとらえようとしている。他のインディオを呼びに行ったのだといった推量は、インディオと遭遇しているという推測上の現実をさらに悲劇的なできごとに連続させていく直線的なプロットの中継点である。危険な平原というテキスト的〈現実〉が、ヘッドにおいては過去の事件と、ダーウィンにおいては未来の事件と、それぞれ結びつけられるという違いがそこにはあるだけだ。

だが道案内人は、そこが前線だというコンテキストからも、また遠くの3人が通常想定される男性の「キリスト教徒」としては、要塞の外にいる点でも馬ののりかたが違う点でも奇妙だという数すくない状況証拠からも、結論めいた答えをだそうとはしない。ちなみに、この道案内人は、この近くで3ヵ月以上まえにインディオの1団と遭遇し、かれひとりは槍で重傷を負いながらあやうく命びろいしたものの、いっしょにいた友人2名を殺されたばかりだった。にもかかわらず道案内人は、経験的判断の誘惑を断ち、未来を予測可能な視野に強引にひきずりこむことを禁欲する。そして「キエン・サベ」という乾いた3音節のエッジでもって、ダーウィン流西部劇のシナリオを切断するのだ。

そのうえで次にかれがおこなうのは、対象が何かを推測することではなく、対象に近づいて実際にたしかめにいくことだった。尻込みするダーウィンにおかまいなく敵を偵察しにいったかれは、最終的にそれが女性だということを発見する。あの3人は、アメリカダチョウの卵をあつめる陸軍少佐の妻とその義妹だったのだ。相手が女性だとわかるや、道案内人はなぜかれらがインディオであるはずがなかったかについて「100もの理由をあげてみせた」という。道案内人は、「キエン・サベ」といったあとは対象接近の方法をダーウィンに指示しただけだったから、「100もの理由」をあげた時点でやっと自

分から語りはじめたことになる。とすれば「キエン・サベ」とは、対象認識の以前と以後のあいだ、対象についてのナラティブ以前と以後のあいだ、否定の判断と肯定の判断のあいだ、そういったもろもろの境界に生じる稀有な発話だということになる。それは過去の経験からも未来の予測からも現在を遠ざけて非決定なまま宙吊りにする。いいかえれば、過去からも未来からも決定されることのないその瞬間の現在を、発話のなかに充足させてしまうのである。

思いだしてほしい。じつにこの現在こそが、植民地主義的言説のなかで無視されていたものだということ。植民地主義的言説のなかでラプラタは、〈すでに〉書かれ読まれたことのある経験の模倣的反復の空間として、また〈いまだ〉実現されていないが確実に予測される未来を待つ空間として表象され、その地の現在は、この〈すでに〉と〈いまだ〉のあいだの不在の時間として無視され消去されていた。だが「キエン・サベ」のひとつは、植民地主義的言説が抹消するその現在を瞬間的に断片としてせりあがらせてしまうのである。

そもそも旅行記のナラティブ自体、おおくはできごとから時間を経たのちにロードムービーふうの直線のプロットに仕立てあげなおされ、さらには前後の脈絡にあわせた説明や加筆訂正、脚注、まえがき、あとがきといったものの饒舌さで水太りさせられ弛緩していくものである。じつは、この饒舌さのなかに、書き手の思考体系のなかにおしこまれて切り刻まれた対象にたいする、書き手の欲望や郷愁が忍びこんでくるのだが、「キエン・サベ」はそういったいっさいの饒舌さを斥ける。「キエン・サベ」がつれない響きをもつかに聞こえるとすれば、それはこの言葉がこの瞬間の道案内人の思考にたいする外部からの理解も共感も反感もうけつけないからだ。道案内人がなにを考えているのか、あるいはなににも考えていないのか、推測することさえできずにダーウィンは、その発話の現在に一瞬立ちすくむ。だからかれはこの言葉を、隣に括弧つきの Who Knows? をおずおずと添えたうえで、スペイン語のまま英語のテキストのなかに書きとめる。「キエン・サベ」のエッジは、ダーウィンの英語のエクリチュールにも亀裂をいれるのである。

コロニアル・マッピング

それにしてもなぜ旅行者は道案内人を雇わなければならなかったのか。理由のひとつ

として、精密な地図の入手が困難だったことがあげられよう。1819年にブエノスアイレスに到着したマイアーズは「イギリス製の最良の地図」を持参してきていたが、「〔駅宿の親方に〕教えてもらった道についての情報はまったく載っていないうえ、ほかにもたくさん誤りがあるのでほとんど使いものにならなかった」ために、ブエノスアイレス州アレコからサルト村まで実際は14レグアのところを20レグアぶんの馬代をだましとられたと憤っている(19)。だがマイアーズからすこし時代をくだると、ブエノスアイレス市で地図を入手しようとする旅行者もいたのだろう、1830年9月10日にブエノスアイレス市で発行されていた外国人むけ英字週刊新聞『ブリティッシュ・パケット』 *The British Packet and Argentine News* 第264号には、アルゼンチン北部国境周辺についての地図の広告が掲載されている。

あたらしい地図
この型では最高品
アルゼンチンとボリビア両共和国のあたらしい地図、両国がパラグアイ川とラプラタ川の自由航行について抱いている共通の関心と意義をしめす小冊子つき。カンガージョ通り92番地の本屋、ユニベルシダー通り55番地の本屋、ベインティシンコ・デ・マージョ通り39番地コマーシャル・ルームにて販売中。付記：小冊子には英語と西語の両方あり(20)。

さらにこの4カ月のちにも、

おしらせ
1826年に航行したパブロ・ソリア殿の作による、水源からネンブケーまでの <u>ベルメッホ川</u> の地図。ソリア氏による5年間のパラグアイ滞在の詳細な報告つき。ピブリオテカ通りの州立出版局、バクル氏の石版印刷所にて販売中。60頁、地図つき、5ペソ也(21)。

しかし、この時期とくにさかんに地図が作られたのは、北部というよりむしろ南部のインディオとの境界地帯であった。軍事的な征服もさることながら、フロンティア行軍

の重要な目的は土地についての詳細な情報を得ることだった。1833年の大フロンティア戦でも、フアン・マヌエル・デ・ロサス将軍ひきいるブエノスアイレス州の左翼師団では、イタリア人の測量技師ニコラ・デスカルツィ（ニコラス・デスカルシ）Nicola Descalziの指揮のもと、移動のたびに経緯度と指示誤差が細かく測定され、前線ではほぼ毎日、気圧、気温、風向き、天気、コロラド川の水位の状態が、1日に計6回から9回にわたって計測されている。博物学的な情報蒐集についてもおこたりにく、行軍先では将軍の命令のもとにいつでも数人の出自を違えるアマチュア〈博物学者〉からなる即席の会議が開かれる手はずがととのえられていた。たとえば1833年7月3日、「フアン・アントニオ・ガレトン Juan Antonio Garretón 大佐は、この野原にふんだんにはえている麻に似た草がまさしく麻であるかどうかを確証できる者を集め、この草が真に麻であるか否かをたずねよ」とロサスは文書で命じている。会議報告は以下のとおり。

ウィリアム・バサースト（ギジェルモ・バトゥルスト）William Bathurst 殿によれば、その草はまちがいなくバサースト殿がヨーロッパで知っていた麻で、より上質のものでさえありうるとのことである。フリードリヒ・ゼート（フェデリコ・サエトゥ）Friedrich Zaet 殿もバサースト殿の言をくりかえしたうえで、ゼート殿の祖国ドイツで栽培されている麻の種と比べてみたところ、やや小ぶりというだけで質も同じとのこと。なお祖国ではランプの油のために麻の種を用いるため、ゼート殿は麻の種の質についてよく存じているとのことであった。エドワード・ルーク（エドゥアルド・ロウルケ）Edward Rourke 殿は、それはまさしく麻だがより上質のものだと思うとのべ、ニコラ・デスカルツィ殿は、もしそれが麻でないとすれば亜麻ないしより上質の麻だとのべる。フリードリヒ・ザイター（フェデリコ・セイドゥテル）Friedrich Seidter は祖国ドイツで知っていた麻であるとのべ、栽培されて精製されればより上質のものでさえあろうとのべた。アンブロシオ・パストール Ambrosio Pastor は、これは疑いなく祖国チリで知った麻であり、ただチリでなされている栽培と精製が欠けているだけだとのべた。閣下に委任された者〔ガレトン〕がそれにつけ加えていわく、フランシスコ・マルティネス Francisco Martínez 殿もまたそれを正統なる麻であると確言するのを耳にしたことがあり、〔パタゴニアの〕テウエルチェ人はこれでもって日常用のもっとも強力な縄を撚るとマルティネス殿が話しているのを聞いたことがある、とのべた。…〔中略〕…追記――

遅れて到着したフランシスコ・マルティネス殿に閣下の高邁なるご命令を読みきかせ、その御趣旨に関して問うたところ、ガレトン大佐がすでに申しあげたことをくりかえしのべたうえで、マルティネス殿はそれは本当の麻であり、ただマルティネス殿の祖国バレンシアでなされているようにしかるべく加工されていないだけだと理解しているとのことである(22)。

ガレトン大佐が行軍日誌に書きとめた土地の測定や植生に関するこういった記録は、それまでしばしばそうであったように、文書館ですぐに眠りについたわけではない。日誌は、当時すくなくとも700件の定期購読数を有していた官製新聞『ガセタ・メルカントイル』 *La Gaceta Mercantil* に連載されたのだ(23)。それまでのフロンティア行軍では進軍記録の詳細が公開されることはあまりなかったが、30年代にはいるとフロンティア記録は新聞連載といったかたちで一般に公開されただけでなく、システムティックに出版されるようになった。

とりわけ注目されるのは、ロサスが事実上の独裁体制を樹立した1835年の翌年から3年間にわたって刊行された『リオ・デ・ラプラタ諸州の古代史と近代史に関する著作および史料叢書』 *Colección de obras y documentos relativos a la historia antigua y moderna de las Provincias del Río de la Plata* だろう(24)。20年代にアルゼンチンに渡ってきたナポリ人ペドロ・デ・アンヘリス（ピエトロ・デイ・アンジェリス） Pedro de Angelis 監修のもとに、全6巻からなる叢書として州立出版局から出され、マッカンなどのヨーロッパ人旅行者も参照しているこの書物には、それまでにおこなわれたいくつかの重要な、しかし編者アンヘリスの言葉によれば「さまざまな時代に知事たちや副王たちに送りつけられたもろもろのプロジェクトの混沌のなかに紛れ込んだままになっていた」(25)フロンティアの行軍日誌が収録されている。行軍日誌とはいうものの、「野蛮人」と呼ばれるインディオとの軍事衝突の記録はむしろまれで、収録された記録の大部分は、距離、土地の形状や土壌の質、気候、植生、ラグーンや河川の幅・形・深さの測定記録、フロンティア周辺の住民やインディオの風俗習慣、場合によってはかれらの交易のようすといったもろもろの〈科学的〉な観察記録となっている。

そうであるなら、つぎのようなことがいえるだろう。この時期、ラプラタがかたや「ヨーロッパ人観察者の権威」によって観察され記述され、ヨーロッパの知の体系の内

部にマッピングされていったとすれば、そのラプラタ（ないしラプラタ分裂後のアルゼンチン）じたいが他方でヨーロッパと同じ身振りをみずから反復していたのだ、と。つまり、ペドロ・A・ガルシーア Pedro A. García 大佐やホセ・マリーア・デ・ロス・レジェス María de los Reyes 技術将校といった軍人エリートをフロンティアに送りこみ、かれらが観察し記録したテキストを蒐集し、州立出版局から刊行することをつうじて、ラプラタの政府は、フロンティアを見えるものとして〈周縁〉化したうえで、一見したところ異なっているようだが実は同じひとつの連続面にある親和的な場所——たとえばドイツやチリやパタゴニアと同じ麻がはえている場所——として、その空間をマッピングしていったのだ。ついでながら、19世紀アルゼンチンの代表的な文学作品のおおくがフロンティアを題材にとっていることを考えあわせれば、フィクショナルな叙述行為と、アルゼンチン国家の地図のなかに観察されるフロンティアを登録していくという科学的で政治的な営みが無関係でなかったことは明白だろう(26)。

さらに留意しておきたいのは、フロンティアや地図化されていないラプラタの地域は、ナショナルな支配的諸集団によって体系的に知の領域にとりこまれるのと同時並行的に、ヨーロッパの知の体系のなかにもとりこまれていったことだ。たしかに独立して日の浅い時期には、ラプラタの独立政府によるデータ処理とその公開はほとんどなされておらず、ヨーロッパ人による直接的な観察と記述を待つしかなかった事情もあったろう。だからマイアーズは、他の旅行記を参照し、かつ自力で旅行を敢行しながら、地理学的観察、金融、農業、統計、現地の政治状況、風俗習慣等を網羅的に調査し記録した『チリとラプラタの旅』 *Travels in Chile and La Plata* を刊行した。その業績を評価されてマイアーズは、1839年には動植物学研究会の学会リンネ協会に、その4年後には王立学士院の会員に迎えられたのだった(27)。

しかし、1830年代にはいと、状況には変化がみられる。1824年から32年まで在アルゼンチン・イギリス総領事と代理公使の職にあったウッドバイン・パリッシュ Woodbine Parish は、任務についた時点でラプラタ諸州全体についての体系だった地理学的情報がないことに気づき、みずから著作活動を開始する。だが政情変化の激しい当時の任務期間中には完成はおぼつかず、アルゼンチンから遠くはなれた地で執筆せざるをえなかった。この帰国後のパリッシュの執筆活動をささえた人物のなかでとりわけ謝意を表明されている人物のひとりが、大牧場主にして軍人エリートでのちの独裁者フア

ン・マヌエル・デ・ロサスなのだ。それというのも、「ロサス将軍は、将軍みずからの命によりインディオの領域を侵略したさいの行軍ないし遠征の記録と、将軍指揮下の遠征隊に協力するためにメンドサ州から送られてきた軍の遠征記録をふくめて、1834年までに政府が所有していた地理学的資料のすべてを組み込んだ大縮尺のブエノスアイレス州の地図を数枚、とりわけてわたし〔パリッシュ〕のために作製するようにと地勢局に命じてくれた。メンドサから送られた遠征隊の記録からは、多くのあたらしい情報、とくにアンデス山脈を水源に、南緯34度付近を流れて南米大陸のこの地域一体のもっとも顕著な地勢を構成していながら、現在までのところもっとも漠然としか素描されてこなかった多くの川の流れに関する情報が得られた」からである(28)。

だから、1839年に出版され、ダーウインの『ビーグル号航海記』とならんで「近代地理学の歴史において一時代を画する著作」としてアレクザンダー・フォン・フンボルトに絶賛された(29)『ブエノスアイレスとラプラタ諸州』*Buenos Ayres and the Provinces of Rio de La Plata* は、独立後にラプラタをおとずれたヨーロッパ人旅行者によって書かれた作品のなかでも特異なものひとつになっている。それがいわばアームチェアー・トラヴェラーによって書かれた旅行記になるために必要なラプラタのナショナルな支配的グループの直接的ないし間接的な協力を得てはじめて、このテキストは書かれえたからだ。ちなみに、この初版が出版される直前、ロサス政権下で刊行されたデ＝アンヘリス編纂の叢書がイギリスに届いた。その史料の詳細さに仰天したパリッシュはさっそく初版の大幅な加筆訂正の作業にとりかかっている。もろもろの事情から決定版となる第2版が上梓されたのは、皮肉にもロサス政権が倒される1852年であった。ブエノスアイレスではようやくこの年パリッシュの初版翻訳が刊行されたが、新版の刊行をうけてスペイン人フスト・マエソ Justo Maezo による第2版の翻訳が出されたのは、独裁者の椅子をおわれたロサスが亡命先イギリスのサザンプトンに腰をおちつけたその1年（一説に2年）後のことであった。

翻訳の可能と不可能

距離、深さ、高さ、広がり、速度、方向などの数値を測定することに強迫観念めいた欲望をいただいていたフロンティア行軍日誌の書き手たちはいうにおよばず、ヨーロッパ人旅行者もまた、フロンティアの地図作製作業を彷彿させる言述や記号、数値をテクス

トに書きこむことに熱心だった。旅行者は、たとえどんなに小さな村であろうと滞在場所を経緯度のタブローの中にしるしづけなければ気がすまなかったり（ボウモント）(30)、内陸地域の植生や地域ごとの土壌の違いをあげつらねることに快感をおぼえたり（アンドルーズ）(31)、アンデス山中の場所ごとの高度と気温を測定し表にして悦にいたりするのだった（マイアーズ）(32)。なかにはヘッドのように、「アンデス山脈は南米大陸を北から南へと走っている。それゆえ山脈は大西洋と太平洋のそれぞれの海岸線にほとんど並行しており、それぞれが大洋と山脈に境を接する不均衡なふたつの部分に分けている」(33)と、南米大陸の地図を開くところから本文第1章の冒頭を説きおこしていくこともあった。

このような文章のなかでラプラタは、ヨーロッパで発明された地図記号に翻訳され、世界の他のどの地域とも数値や記号によって置換可能な透明で親和的な空間として、すでにそこにあるものとしてくりかえし確認される。ラプラタが翻訳可能な領域であれば、山がちのチリがスコットランドやスイスの高原のようにみえても（ヘッド）(34)、アルゼンチンとチリ国境のトゥプンガト山と、フンボルトが測量したことでヨーロッパに名を知られるエクアドルのチンボラン山がひとつのグループでくくられても（マイアーズ）(35)、1833年の対インディオ戦争で奪取したブエノスアイレス州南部の土地が「スペイン王国ないしフランス王国全体の広さ」に還元されても（パリッシュ）(36)、不思議はなかった。また空間が置換可能でホモジニアスなら、その住民もヨーロッパの風俗に翻訳可能であってよかった。アンドルーズがアルゼンチン内陸で出会った現地の「ガウチョ」は、ロンドンのボンド・ストリートの青年にみたてられ、かれのまとうポンチョは大英帝国の植民地「インドの上等なショール」そっくりで、「バーミンガムの輝く指輪」をみせびらかしながら葉巻を吸うような「ダンディ」だというのである(37)。ラプラタから未知なもの、非親和的なものをはぎとってヨーロッパにとってなじみぶかいすでに知られた空間にしていくこのような言説は、その空間を記号化して均していく地図化の言説をその根底に据えていた。19世紀のラプラタは、いわばこうした地図的な言説によって囲いこまれていったのだ。

しかし、当時の旅行記や行軍日誌がすべてこういった地図の言説の内部で編まれたかといえばそうではなく、支配的で抑圧な地図の言説から溢れでてきてしまう過剰な部分も同時に織りこまれていた。あるとき、ヘッドとその一行は、コルドバ州との州境近く

のエル・モーロという駅宿を、予定よりかなり遅れて出発した。そのときヘッドたちは、どう見ても8歳以上ではなかろうと思われる少年を道案内人として雇っていた。少年は駅宿の親方から近道をするようにとの助言をうけていた。

とうとう雨が降りだしてきたうえに、駅宿を見つけることができるかどうかなど「キエン・サベ」"Quién sabe" というのだ。少年は1度もこの道を通ったことはないとのことだった。たちどまっても無駄だったので、馬をギャロップさせながら駅宿の親方が少年に与えた指示を話させたが、いったい何のことをいっているのかさっぱり理解できなかった。少年の描写を聞いていると、まるでわたしたちは山がちの場所を横切っているように思えるのだが、わたしには山も谷もいっこうに見えなかった。だがガウチョたちは、かれらにしか見分けることのできない山や低地でもって原野を区切るのである(38)。

同じ空間をまのあたりにしていながら、それを同じものとして見るができないこと、道案内人の少年やかれに指示を与えた親方がヘッドとはまったく異なった空間把握のしかたをしていることに、ヘッドはナイーブな驚きを隠さない。しかも、その違う空間把握のしかたが、ヘッドの空間把握のしかたとは違う純然たる差異としてあることだけは感知できるにしても、その差異がどのようにしてそうであるのかを説明し理解することはできない。それはただ純粹な差異として瞬間的にたちあがってくるからである。

アルゼンチンにやってくるまえはエディンバラの技術師団に配属されていた技術将校ヘッド船長にとって、地形は計量可能なものから組み立てられている。数値に還元するものとしてまず地形はそこにあるのだ。たとえば「サンティアゴの南東75マイル」にあるチリのサン・ペドロ・ノラスコ鉱山を訪れたヘッドは、真夏であるにもかかわらず、「鉱山の官吏がわたしにくれたデータによれば20フィートから120フィートの厚みになることもある雪」に行く手をはばまれつつ鉱山の入り口にたどりつくが、そこはまた「50フィート」の積雪で、鉱山労働者の働いているところまでいくには、坑道を「250フィート」ばかり降りていかなければならなかった云々といったように、数値に置き換えることによって大地の勾配や地表の変化、移動距離を説明する(39)。それとわかる地形の違いは、同時に計測される数値の違いで示されるはずのもので、逆に数値に変換でき

ない違いは相違として認めることはできない。ヘッドがエル・モーロ近くの地形に山や谷を認めることができないのは、ヘッドのなかに数値に変換可能な山や谷の規範がすでにあり、その規範の外部にある空間はおしなべて「平坦」で「モノトーン」な大地にすぎず、地図の空白部分としてくくられてしまうものだからである。ところが少年や親方は、ヘッドが平坦としか見ない場所に山や谷を認める。おそらくそれは、高度何フィートの差で山か谷かといいかえることのできない山や谷だろう。おそらくまたその同じ高度差を別のところにもっていても、はたして同様に山であったり谷であったりしつづけるわけでもないだろう。たぶんその起伏はこの場において山や谷として充足しており、度量衡といったものに還元することのできないたくい大地の変化だからである。

ナポレオン戦争の敗残将校となってアルゼンチンにわたってきたフランス人の地形測量士ナルシス・パルシャップ Narcisse Parchappe も、1828年におこなわれたフロンティア遠征の記録のなかで道案内人の空間把握のしかたについて記述している。ちなみに、ロサス司令長官の命令下、クルス・デ・ゲーラに新要塞建設をめざして作製された遠征の測量地図は、ブエノスアイレス州の戦争省に、測量報告書は地勢局にそれぞれ提出されたが、それとは別に、地図をふくむより詳細な行軍日誌がパルシャップの手で編みなおされた。その日誌のテキストは、1826年から33年にかけて南米を訪れ、アルゼンチン北部で1年、パタゴニアで8ヵ月をすごしたパルシャップの友人のフランス人博物学者アルシド・ドルビニー Alcide D'Orbigny の全9巻からなる大著『南米の旅』 *Voyage dans l'Amérique Méridionale* におさめられている(40)。

ブエノスアイレス州の「人の住んでいるところ」をあとにし、インディオが行き来する地帯を通過しつつあったフリアン・ペルドリエル Julián Pedriel 上級曹長ひきいる第6騎兵連隊は、インディオの急襲を怖れて馬その他の家畜を守る特別班を後衛に、見張りを縦隊の側面に、半レグア先に前衛小隊を配すなど隊形を編成しなおしたが、そのさい先頭にたって連隊全体を導いていたのが道案内人すなわち「バケアーノ」baqueano だった。

かれら〔専門のバケアーノ〕は風や太陽やかれらが知っている星座によって方向をさだめる。またもろもろの土地を認知する奇蹟的な記憶力と驚異的な洞察力をもっていて、パンパが単調平坦で場所ごとの多様性がほとんど見えなかつたと、バケアーノはどんな

人の目にもとまらないようなとても微小な様相の差異を見わける。同様に、植生の性質や幼少期から特別な学びをつみかさねてきた1,000もの兆候によって導かれるのだ。…

[中略] …バケアーノはめったにレグアで距離を測定しないし、その度量衡の本当の概念はまったくもちあわせていない。かれらの算法の基礎は馬を走らせた時間で、「この場所からあの場所まではギャロップでこれこれの時間だ」といったように表現する。国の軍隊はかならず数人のバケアーノからなる1班をつけており、通常はそのなかでもっとも評判が高くもっとも広い知識をもっている者が指揮をとっている。わたしたちの遠征にはふたりいた。ひとりはお老人で、独立革命の前はこの地域一帯に棲んでいたインディオの部族とかなり長い年月にわたって闇交易をしていた男で、かなり以前からかれらを訪れてはいないが、すべての土地とその地のインディオたちの名前を完全に覚えていた。もうひとは最近のいくつかのサリーナス遠征に参加し、州政府がおこなった借用地計測にたずさわった測量技師に同行して、今回のわたしたちの目的地のさらに向こうまでいったことのある若者だった⁽⁴¹⁾。

ヘッドが出会った少年のいう山や谷が等高線で示すことができないように、パルシャップが出会った道案内人の距離もレグアやマイルで測ることはできない。星や太陽の位置や風から経緯度が測定されるわけでも、またリンネの分類用語に植生の性質を翻訳するわけでもないだろう。地図記号や数値に置き換えて空間を記述したり、またそう記述されうるものとして空間を見る知覚体系から差異化された場所にいる道案内人は、曖昧で非精密なものの配置されている空間として世界をとらえ、またその精密さを欠くものとものとのあいだの、これもまた精密でありえようはずはない差異のはざまを進んでいくものとして描写されている。道案内人は、パルシャップのように理念的な記号に還元されるものの秩序として空間を再構築するのでなく、感性的に把握されるものの秩序として空間を再構成する。

ドリッカーとしての逸話

ところでまた、こういった空間把握のしかたは、精密でない時間的＝空間的なもろもろのかたちや、明確でない曖昧な諸本質をもつ形態学的な諸類型といったものをあつかう「前幾何学的で記述的な科学」*science descriptive pre-géométrique* をさして、エドモン

ト・フッサール Edmund Husserl の遺稿「幾何学の起源」への註解のなかでジャック・デリダ Jacques Derrida がもちいている呼称を借りて「大地書記術＝地理学」 *géographie* と仮に呼ぶことができるのかもしれない(42)。しかし、わたしがここでフッサール＝デリダを引き合いに出すのは、この道案内人の空間把握のしかたにひとつの名前をあたえるためではない。かえって、「大地書記術＝地理学」への遡行が、ほかならぬ幾何学的な思考の成立をその絶対条件にしていることをフッサール＝デリダは想起させてくれる。つまり、道案内人の空間把握のしかたが、技術将校ヘッド船長や測量技術者パルシャップのテキストに記述されているのも、逆説的ながらそれらのテキストが地図的な眼差しによって空間をとらえる認識形態が成立したあとの産物だからであることを思いださせてくれるのである。

道案内人の空間把握のしかたは、地図的な空間把握の思考体系によって媒介されることによってはじめてテキストに書きとめられうるものとなった。とすれば、地図の言説を完全に消しざったところで、純粋なかたちでそれを把握することはできない。おそらくそれは、それ自体を忘却の彼方へ送りやる、抑圧的な機能をはたす地図的な思考体系の、いわば〈イデオロギー〉的なヘゲモニーがあってはじめて感知されうるたぐいのものだ。

いや、すでに構築された幾何学という〈イデオロギー〉支配のヘゲモニーのもっとも手前、大地の計測術のさらにその下に沈澱してあるものをさしてデリダのいう「感性的な形態学」 *morphologie sensible* という抽象化された概念で、道案内人の空間把握をとらえることはたしかに可能であろう。が、それを安易に歴史的な諸実体とつらねて考えること、すなわち、ヘッドがそう呼ぶ「ガウチョ」やパルシャップが総称する「バケアーノ」といった実体化された諸集団に純粋なかたちで内在する思考体系としてとらえることは禁欲しなければならない。たとえばサルミエントのいう「バケアーノの科学」 *ciencia de Baqueano* (43)、20世紀の作家で批評家のエセキエル・マルティネス＝エストラダ Ezequiel Martínez Estrada のいう「バケアーノの知性」 *inteligencia de baqueano* (44) といったように、あるいはまたレヴィ＝ストロース Lévi Strauss がそう呼ぶ「ブリコラージュ」 *bricolage* (45) や、いわゆる民衆史のなかでもちいられる「民衆の知」 *popular knowledge* といったように、そのものとして自律的な歴史的実体の内的合理性として提示してしまっ

てはならないということだ。くりかえしいうように、「バケアーノ」、「ガウチョ」、

「民衆」といった〈かれら〉＝他者集団にあたかも構造的に内在する単一の認識様式が
 あらかじめそこにあつて、ヘッドやパルシャップがそれと出会ったわけではない。そう
 いった〈かれら〉を、書き手である〈自分たち〉とは異なった、〈かれら〉自身に固有
 の均質な認識様式をもつ〈かれら〉として構築しているのは、〈かれら〉をそのような
 ものとして感知させている地図的な言説体系なのであるから。

地図的な言説体系の地平でなされているのとは質的にまったく異なった空間把握のし
 かた、いいかえれば異なった共同主観性の領野が〈かれら〉と指示されるひとびとのな
 かになかったといっているのではない。あつたかもしれない。いや、おそらくあつたに
 ちがいない。けれどもわたしは、その共同主観性それ自体を、あらかじめ存在する透明
 ななにか、〈かれら〉に内在する自明のなにかとして直接問うことはできないのではな
 いかと考える。また、そういった悲観的な立場を意識して戦略的にとる必要があるだろ
 うとも考える。

むしろわたしが問いたいのは、〈かれら〉の共同主観性の領野それ自体を問い、論
 じ、それに合理的な説明を与えることは、あらたな抑圧的言説の創出に寄与すること
 になりはしないか、ということである。〈かれら〉に固有の思考様式が地図的な言説との
 差異として限定的に見いだされるのではなく、またほかならぬその地図的な言説に隣接
 してあるというのではなく、それとはまったく別なものとして存在すると前提したとた
 んに、〈〈わたしたち〉の地図的空間把握の様式〉対〈〈かれら〉の思考様式〉という
 閉止的な二項対立の構図が構築される。そして、この二項対立の内部で表象される〈か
 れら〉の表象の閉止は、その他者（〈かれら〉）にたいして抑圧的に機能するだろう。
 というのも、それは、単一の思考様式をもつものとして〈かれら〉を固定化し、その内
 部で〈かれら〉の思考様式を均質化し、思考様式というきわめてエセンシャルな概念を
 もちいて〈かれら〉を本質化したうえで、そうした〈かれら〉を〈わたしたち〉とは根
 本的に異なる——しかし説明可能な——集団として差異化する、差異論的な言説を意図
 せずして構築してしまうからである。しかも、それがナイーヴに〈かれら〉の生活環境
 や人種やエスニシティに結びつけられて考えられるなら、そのときにはレイシズムに接
 合していく道すじをつくってしまうことになる。

こういった本質主義的な議論の磁場から身を離すためには、認識論的な反省をやめる
 わけにはいかないだろう。と同時に、この一方では、植民地主義的なテキストのなかに

しのびこむトリッカーたち、すなわち植民地主義的な言説を攪乱し、言説が指向する直線的で求心的な言述の秩序を逸脱させ、ときに瞬間的に転移させ、言説のライトモチーフにたいして共約不可能性をつきつけるグランジの部分回復する必要があるのではないかと、わたしは考える。そのトリッカーとしてここで注目してきたのが、テキストに書きつけられている複数の逸話である。もろもろの逸話は、ラブラタの旅行記のなかで、あるときはひとつの発話として、あるときは地図的な思考様式から差異化されたなにかとして、またあるときは（これからのべるように）抵抗の予感を示唆するものとしてねじれたやりかたで感知される身振りとして、コンテキストやロード・ムーヴィー風の語りに回収されずに書きのこされている。そして、たしかにいえるのは、一貫性のない多様なエピソードのかずかずは、ほかならぬ現地の道案内人との接触の場に生じているということである。

目的地クルス・デ・ゲーラに到着した第6騎兵連隊のなかの1班は、そのさらに先まで歩を進めたところでインディオの集団が近くにいる可能性を示すまあたらしい馬の足跡を大量に発見し、その時点でクルス・デ・ゲーラの本隊に合流すべくあわてて帰途についた。そのときのことである。

すぐにわたし〔バルチャップ〕は、道案内人たちがわたしたちを連れてきたのと同じ方向ではなくて南よりの道を進むことにしたことに基づき、たぶんかれらはわたしたちに「メダノス・モニゴータス」を通過させようとしていたのだろうと推測した。じっさいほぼ2レグアほど進んだのちにかかなりの数の頂が集まっているのが観察されたが、同様の観測をしなかった指揮官は、それをクルス・デ・ゲーラだと思いこんでいた。しかし出発するさいにわたしたちが取り決めておいたしるしの黒煙が突然右手にあがったことから誤りに気がつくやいなや、指揮官の顔は青ざめていった。道案内人たちがわたしたちをだまそうとしたのだと思い激昂したのだった。大声で道案内人たちを呼びよせるや、おのれの職務を知らない馬鹿野郎よばわりして、かれらに罵詈雑言を浴びせかけた。これらの哀れな不運の者たちは、悪意のない良心からそれほどの迂回にならないからには、モニゴータスのラグーンを訪れたほうがわたしたちにとってもつごうがよからうと信じこんでいたのだ。かれらはおおいに苦勞したのち、やっとのことで指揮官をなだめた。もしや現実に道に迷ってわたしたちがパンパのただなかでひと晩すごさなければ

ばならないなどということになったなら、指揮官をなだめるのがどれほど困難なことになるかということに、わたしは気づいたのだった(46)。

いうまでもなく、軍人エリートとフランス人軍属技師のふたつのテキストに二重に仲介されている以上、ここに「バケアーノ」の集合的な裏切りの意志そのものを読みとることはできない。だが、道案内人とはまったく切り離されて指揮官個人の意識や言述が展開されているわけでもない。また書き手の言述自体も、軍の行動を先取りして読む道案内人の〈読み〉のテキストや、道案内人の行動を読む指揮官の〈読み〉のテキストに媒介されることによってずれが生じ、複合化されているからには、純粹にパルシャップ自身の閉鎖された内省の言表になっているわけでもない。道案内人、指揮官、パルシャップのどれかひとりの主観に還元することのできない〈常軌を逸した=脱中心的〉ex-centric な場、植民地主義的言説と〈読み〉の複合化された間主観的な場、行為と〈読み〉の意味作用の時間的なずれの場、緊張をはらんだ対話の場が瞬間的にそこにはきりひらかれている。そして、その間主観的な場に一瞬にしてうかびあがり消えていくのが、「わたしたち」にとって得体の知れない道案内人の裏切りや抵抗の潜在可能性という表象である。もちろん、それはそこにいる「悪意のない良心」の道案内人自身であるわけではない。しかし、その道案内人自身からまったくかけ離れたところで、支配的な言説の内部だけで繰り広げられる表象の戯れの産物でもない。

おそらくそれは、フロンティアとそのインディオという〈他者〉をまえにして道案内人をふくむ〈わたしたち〉をひとつの単一のものとみなす同化主義的言説をその絶対的根拠としてすすめられてきた、フロンティア遠征の言説に生じた亀裂からあらわれた表象である。インディオと非インディオを人種主義的にも住環境的にも弁別し分類する言説は、道案内人の身振りひとつで他愛なくそこにひびを生じさせてしまっているのだ。また、道案内人が裏切ったと、つまりインディオと同盟していると一瞬考え、そのような存在としてそれまで無微にすぎなかった道案内人を主題=問題 subject 化するというひとつの転倒のなかから生じた表象である。道案内人が実際に裏切ろうとしたかどうかはさしあたりどうでもよい。重要なのは、支配する者とされる者が明確にコントラストをなす軍隊というきわめてヒエラルヒー化された場にありながら、命令し、軍を進めるといふ指揮官の意志によって貫かれてきた一連の旅は、じつはたやすく別の意志に侵犯さ

れうるのだということ、そしてまた指揮官の意志から独立した自律的な空間の読みと認識、判断と行動が現実そこに存在することが暴露されてしまったことである。いかなる支配的なヘゲモニー権力もかならずしも永続的に決定的で絶対的でありつづけるわけではない瞬間が、そこには感知されているのだ。パルシャップのテキストは、指揮官の足下にそうした非決定的な現在が一瞬にしてひらいたことを記録している。道案内人はこのとき不透明な存在となり、ヘゲモニー以前ないしその手前にいる不気味な表象としてテキストに残されるのである。

むろんこのエピソードは、1年後にこのあたり一帯におこった広範囲で大規模な反乱、「アナキスト」と呼ばれた日雇い労働者や軍の脱走兵、バガブンドなどが、インディオ諸集団と同盟してひきおこした1829年の反乱(47)を直接的に指示しているわけではない。このエピソードは、反乱といったあきらかに対抗的な行動実践として支配者層の文書史料のなかに書きのこされる以前／手前のできごとにすぎない。しかし、ヘゲモニー関係のなかで他者化し疎外し周縁化することが、カウンターヘゲモニーの構成とじつは同時的であるかもしれないと支配権力の側が感知してしまったこと、そして、そのヘゲモニー関係は転倒のモメントを潜在させるなにかかもしれないという予感が、これもまた支配者層の文書史料のなかに書きのこされている事実を、このエピソードは示しているのである。すくなくとも支配者側の自己のポジションを絶対視する主体意識がそこで一瞬揺らいでいることには疑いを入れない。そしてこのような転倒の予感のモメントとなったものこそは、植民地主義的言説のなかでけっして予見されることのなかった〈予想外の〉道案内人の身振りにほかならないのだ。

ここでわたしの念頭にあるのは、ホミ・バーバ Homi K. Bhabha がロラン・バルト Roland Barthes の提示した「非=文」 non-sentence の概念を手がかりにしながら、またバーバ自身が「模倣」 mimicry や「ハイブリディティ」 hybridity といった概念装置を用いながら析出させようと試みてきた、従属的な行為性 subaltern agency が生産する破壊的な戦略の解読作業である。バーバによれば、従属的な行為性とは、それ自体としては超越的で透明なものではなく、またそれ自体としては一元的で有機的で自律的なものではない。というのも、「間主観性の効果としての主体=主題=問題 subject の場形成 individuation の瞬間は、シニフィアンの時間的なずれにおけるそれ自体の分裂の結果、行為の作因 agent としての主体の回復というかたちで出現する」からである(48)。反復的で偶

発的であるという特質をもつ間主観的な関係の内部での「計算＝当てこみ calculation、交渉 negotiation、たがいに問うこと interrogation の対話的な位置のなかに存する」行為の作因をとりもどすことにおいてほかに、従属的な行為性へと接近していく可能性はない、とバーバはいつている。本章での読解作業も、そのひとつの例示とってよいだろう。

支配者側の言説を記述し、強化していく植民地主義的言説の内部には、それとは異質ななにかがつねに織りこまれ、一様なものとして他と混じりあうことなく混在している。それは植民地主義的言説を中断する発話をつうじて、コロニアルな地図の言説とは違うがそのものがなんであるかは問うことのできない差異として、また支配者側のポジションの危うさを回復し、そのヘゲモニーを一瞬揺らがせるかにみえる身振りをつうじて、植民地主義的言説に亀裂を入れてしまっているのである。植民地主義的言説が歴史的に均質に連続的な〈主体の言説〉としてあまねく世界を覆っていくというとらえかたでは、こうした亀裂はおおい隠されてしまうだろう。また、反乱といったように顕在化されたできごとだけに注目することによっても、同様に隠されてしまうだろう。

けれども、はたして植民地主義的言説はそれほど均質で強固なものでありつづけえたか。植民地主義的言説がその対象に歴史的におしつけてきたステロタイプに還元されない、存在の影ないし代補が、つまりは植民地主義的言説によって規定され服従させられるのとは違う表象が、そこに埋めこまれているのではないか。そこにはつねに支配される側による植民地主義的言説にたいする〈反逆〉のモメントがあったのではないか。そういうモメントを回復していくことによって植民地主義的言説そのものの根拠のなさがあぶりだされ、ひいては植民地主義的言説の権威を脱構築していく助けになりうるのではないか。こう問いつづけながら過去のテキストを再読することが、いま必要なのではないかとわたしは考えている。